

徹底的行動主義の視点からみた仏教の三法印の意味

Three Seals of Dharma in Buddhism from a Point of View of Radical Behaviorism

○ 渡辺修宏, 森山哲美

(水戸看護福祉専門学校) (常磐大学)

NOBUHIRO WATANABE, Tetsumi Moriyama

(Mito Nursing & Welfare College) (Tokiwa University)

Key words: three seals of dharma, radical behaviorism, Buddhism,

はじめに

佐藤 (1990) は, Skinner を「自覚せざる仏教徒」と記した。これは, Skinner の考え方が仏教的であることを意味し, 同時に, 行動分析学と仏教に相似するところがあることも示唆する (瀬島, 1987)。事実, 海外の行動分析学者は, 行動分析学と仏教の共通点を指摘する論文を発表している (Baum, 1995; Diller & Lattal, 2008; Williams, 1986)。さらに, 行動分析学に基づく心理療法の ACT には, 禅の考え方と共通するところがある。これらのことから, 行動分析学と仏教にはなんらかの相似性があると考えられる。そこで本研究は, 仏教の基本的な概念である諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜, すなわち三法印¹⁾ の概念を, 行動分析学の哲学的基盤である徹底的行動主義に基づいて行動的に翻訳し, 行動分析学と仏教の相似性と, それが行動分析学にもたらす意味について考察する。

三法印の概念とその行動的翻訳

三法印の諸行無常は, すべての事物が常に変化することが常態であるということの意味する。諸法無我は, すべての事物の性質や性格特性, あるいは存在そのものは, すべて他との相互作用で決定され, それ自体の固有の性質ではないということの意味する。そして, 涅槃寂靜とは, 諸行無常と諸法無我によって, 無常であり無我である現実世界において, あらゆる執着がない状態を意味する (中村, 2000a; 2000b; 三枝, 2000)。以上が三法印の説明である。

次に, これら三法印を, 徹底的行動主義の視点に基づいて, 人とヒト以外の動物を含めた行動の視点で翻訳すれば, 諸行無常は, 刺激と行動の機能的な関係が常に変化するということになる。このことは, 随伴性の変化における行動の変化そのものが諸行無常であるということの意味する。諸法無我は, 三項随伴性をまさに説明する。行動は弁別刺激によって制御され, また行動に随伴する結果によって制御される。この機能的な制御によって行動も環境も規定されることから, それぞれが相互に関係するということになる。つまり行動は, 行動を取り巻く環境とのかかわりによって説明され, また環境も行動とのかかわりによって説明される。そのような相互関係が諸法無我といえる。

最後に, 涅槃寂靜は, 人間の行動について言えば, ル

ールによって制御された行動が最終的に随伴性による制御へと移行した状態, あるいは随伴性に委ねられた状態と捉えられるかもしれない。

行動分析学と仏教の相似性がそれぞれにもたらす意味

以上の考察から, 三法印の概念だけではあるが, 仏教の概念と, 徹底的行動主義に基づく行動分析学の用語の間には高い相似性があるといえるだろう。相似性があるということは, 行動分析学から仏教に, あるいは, 仏教から行動分析学に何らかの知見を提供できるということの意味する。

例えば, 行動分析学は, 仏教の説明概念の神秘性を科学的に説明できるかもしれない。釈迦の時代からおおよそ2500年を経て, 仏教の教義は, 釈迦を含めた仏陀を神格化するような神秘的要素を含んでおり, そのため, 仏教本来の科学的とも言える視点が正しく理解されていない可能性がある。行動分析学の科学的知見 (あるいは生命科学の知見) は, 今日の仏教の在り方を批判し, 本来の仏教的視点への回帰を促すかもしれない。

一方, 行動分析学よりはるかに長い歴史を持つ仏教は, 行動分析学の行く末になんらかの示唆を提供し, これからの行動分析学が直面する問題の解決につながる重要な視点を提供できるかもしれない。例えば, 行動分析学への他の学問領域からの誤解や, 実験的行動分析学と応用行動分析学の乖離の問題, さらに行動に対する巨視的あるいは微視的な見方にかかわる問題の解明に, 仏教の視点は有益な知見となるかもしれない。

また仏教は, 行動分析学に次のような課題を投げかけるだろう。行動分析学が志向する「行動の予測と制御」によってもたらされる人間世界は, 仏教の視点から見て, 生きとし生けるものの涅槃寂靜といえるような世界なのかどうかといった課題である。さらに, 輪廻のような仏教の生命観を行動分析学からどのように説明できるのかといった問題も投げかけるだろう。

注

- 1) 諸説においては, 三法印に一切皆苦を含めて四法印とする場合や, 諸行無常・諸法無我・一切皆苦を三法印とする場合がある。詳しくは平川 (1968), 中村元 (1998), 三枝 (2000) を参照されたい。